386　泌尿器科疾患の骨転移における骨髄シンチグラフィの有用性の検討

吉越富久夫、町田豊平、大石幸彦、田中　彰、増田富士男、上田正山、木戸　晃、山崎春城、今中啓一郎、長谷川倫男、牧野秀樹（慈恵医大　泌尿器科）

泌尿器科疾患の骨転移病巣に対し^{99m}Tc-DTPAによる骨シンチグラフィと^{111}In-Cl_3による骨髄シンチグラフィを施行し骨転移巣の描出について比較検討した。　症例は前立腺癌10例、前立腺癌と膀胱腫瘍の合併2例、膀胱腫瘍1例である。12例中2例は骨転移を認めなかった。骨転移を認めた10例で骨シンチグラフィにて胸椎、腰椎、腸寛骨に認めた転移巣は骨髄シンチグラフィでcold areaとして認められ、特に腸寛骨ではその範囲がより明瞭に描出された。しかし肋骨への転移巣の描出は不明瞭であった。

中心骨を主体にした骨転移に対し^{111}In-Cl_3による骨髄シンチグラフィの併用は有用性を認めた。

387　骨シンチグラムの画像解析による前立腺癌骨転移巣の定量化

長谷川倫男、木戸　晃、上田正山、大石幸彦、
町田豊平、田中　彰　　（慈大　泌）

前立腺癌骨転移症例の骨シンチグラムを画像解析し、転移巣の定量化を試みた。

前立腺癌患者で初診時に骨転移がみられた50例を対象とした。治療前および治療6か月後の骨シンチグラムを画像処理専用コンピューターのNEXUSで処理し、転移巣の面積と濃度を算出し、治療前の骨転移巣の面積と予後、治療前後の面積および濃度比と予後の相関を検討した。治療前の骨転移の面積が大きいほど、予後は不良で、治療前後の面積および濃度比と予後は比較的良く相関した。画像解析による前立腺癌骨転移の骨シンチグラムによる定量化は、予後予測、治療効果判定に有用であった。

388　頭蓋・顔面骨病変における Dual-isotope (^{201}Tl, ^{99m}Tc-HMDP)SPECT の有用性

津布久雅彦、木暮　喬、金子稜威雄、林　三進、
嶋田守男、伊東邦子　（東邦大　1放）

骨転移巣の検出を目的とした骨シンチ検査において、頭蓋・顔面骨は planar 像では異常集積範囲の正確な把握が困難な領域であり、またしばしば normal variant, hot skull, 副鼻腔炎などが specificity を低いものとしている。また病巣の活動性を直接反映しているとは言い難い。　3検出器型SPECT装置を用い、^{201}Tl imageは投与前にプレ収集を行い、subtraction によって得た。両者の集積の一致、骨集積欠損部での ^{201}Tl の集積を他画像診断と比較検討した。　本法は^{201}Tl 集積の正確な局在の把握が可能で、CT, MRI との比較が容易であった。唯一 MRI での脂肪髄の消失が確認されただけの病巣にも^{201}Tl の集積を認めた。

389　糖尿病患者における腰椎骨塩量、大腿骨骨塩量および全身骨塩量の検討

日野恵、川井順一、伊藤秀臣、山口晴司、才木康彦、石川昌子、太田圭子、富永悦二、池窪勝治（神戸市立中央市民病院核医学科）、服部尚樹、石原隆、森寺邦三郎、倉八博之（同内分泌内科）

糖尿病患者における骨代謝異常を検討する目的で骨塩量の測定を行なった。対象は血糖コントロールのため本院に入院した糖尿病患者50例であり、男性28例（年齢30～79歳、平均54歳）、女性22例（年齢28～74歳、平均56歳）であった。骨塩量の測定はDEXA装置（QDR 1000/W、Hologic社製）を用い、腰椎、大腿骨近位部および全身の骨塩量を測定した。糖尿病患者においては骨塩量と血糖、HbA1c、C-peptid等との間には関連性はみられなかったが、罹病期間が長くなるにつれて骨塩量は低下する傾向が認められた。

Presented by Medical*Online